

國學院大學学術情報リポジトリ

埼玉県東松山市岩殿出土板碑

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松崎, 百恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001932

埼玉県東松山市 岩殿出土板碑

小松崎百恵

1 はじめに

板石塔婆とも呼ばれる板碑は、中世から近世初期にかけて、主に供養塔として造立されてきた。全国各地に出土例が知られているが、県内で確認された板碑が2万件を超える埼玉県は、武蔵型板碑に用いた「青石」と呼ばれる緑泥片岩の産地を抱え、県西部の奥秩父にあたる長瀬市や小川町にて、石材の採掘跡が見つかっている。この緑泥片岩を素材とした板碑は、利根川流域に広く流通し、下流域の東京都や千葉県にあたる地域にも分布が及んだ。

國學院大學博物館では、およそ160点を超える板碑を収蔵しているが、出土地が判明しているものの多くが関東地方出土の資料である。これらの中には、未発表の資料が多数含まれているため、再整理を行っていく過程で出土地毎に報告を重ねていくこととし、昨年度までに千葉縣市川市下総国分寺出土例・東京都渋谷区猿楽町出土例を紹介してきた（小松崎 2014・2015）。そこで今回は、埼玉県東松山市高坂岩殿で出土したとされる板碑2基について報告する。

2 東松山市岩殿出土板碑の概要

埼玉県のほぼ中央に位置する東松山市は、北西に緑泥片岩の採掘地として知られる嵐山町や小川町が控えており、板碑の素材を手に入れやすい地域にあった。市内では、これまでに約800基の板碑が確認されており、1300年代からその数を増やし、1430年前後に減少していく傾向が認められる。その中でも、14世紀後半にあたる延文5（1360）年から応安2（1369）年の間に建てられた板碑が最も多く、総数28基を数えた（第3図）。

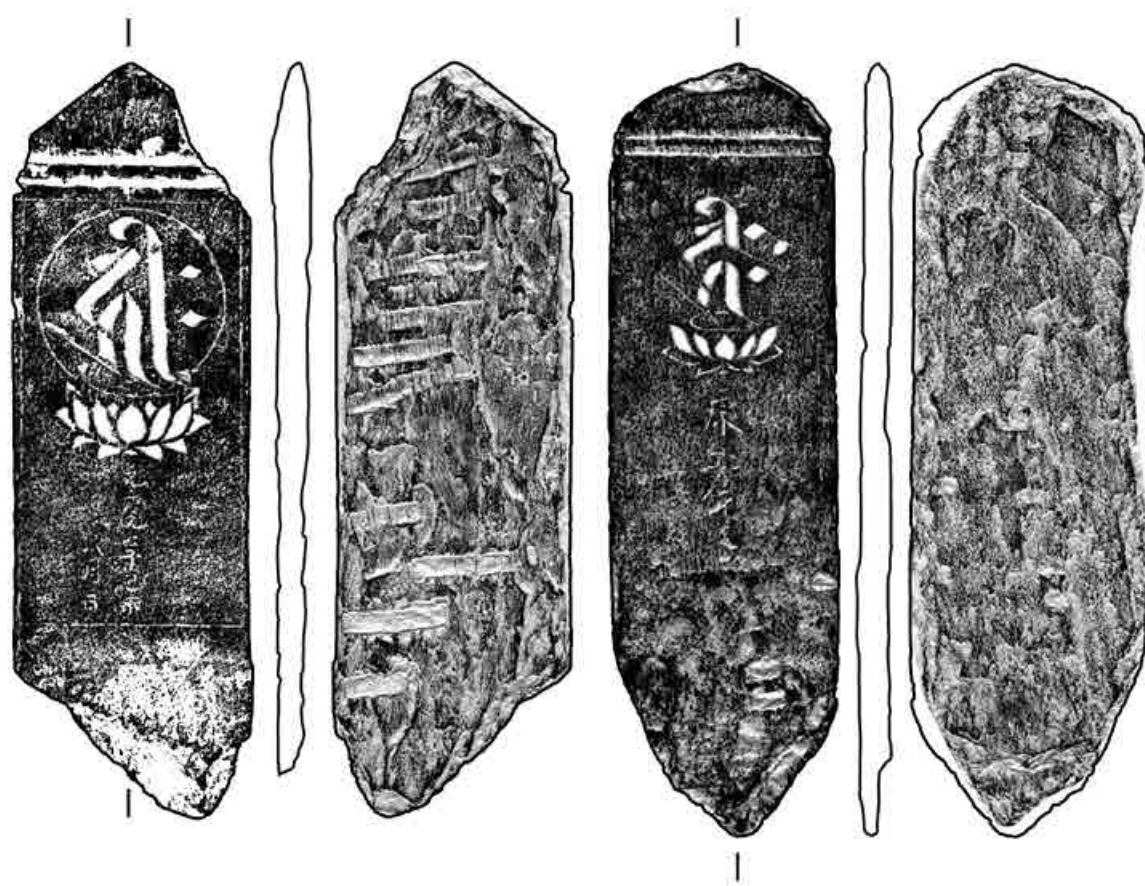
市の南西部に所在する高坂地区は、南北朝期から戦国期にかけての入西郡（入間郡西部の丘陵地帯）高坂郷、近世以降の比企郡高坂村にあたる。同地区には、市内で確認された板碑の50%を超える448基があり、仁治2（1241）年にさかのぼる市内最古の例や、画像板碑のほか、蓮座のかわりに「心」の字を刻んだ心字座形式のものなど、極めて珍しい資料も見られた。特に、本例の出土した岩殿の丘陵では、九十九川の形成した谷戸の両岸に宗教的空間が営まれたものと見られ、巖殿山正法寺の板碑群や、阿弥陀堂跡の高さ約260cmに及ぶ応安元（1368）年銘胎藏界大日如来種子板碑をはじめ、170基にのぼる板碑が遺されている。

3 資料の概観

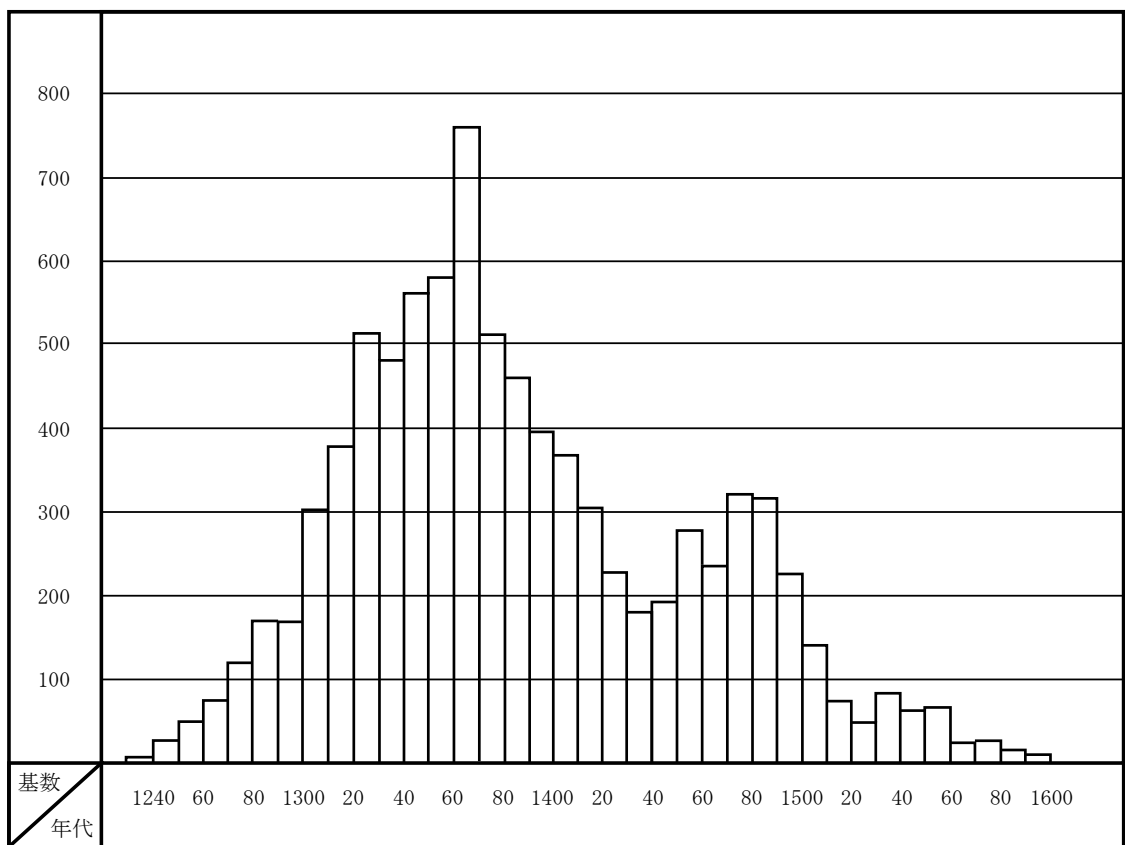
今回報告する2点の板碑は、いずれも裏面に「埼玉県比企郡高坂岩殿」と墨書されており、K1208・K1209の列品番号が付されている。寄贈者は、K1208が野尻保彦氏、K1209が鈴木修一氏である。野尻氏は、前回報告した渋谷区猿樂町出土板碑の寄贈者でもある。

板碑 K1208 (第1図左) 高さ約50.0cm・幅約15.8cm・厚さ約2.3cmの緑泥片岩製武蔵型板碑であり、頭部右側と基部左側部分がやや欠損している。基部や裏面には、鑿による加工痕が残る。表面や側面は、平坦に加工される。頭部に二条線を刻み、塔身部に月輪・蓮台・杵線を施す。本尊としては、阿弥陀如来を表すキリークの種子が薬研彫りで彫り込まれている。また、「元応元年己未 八月日」の銘がある。

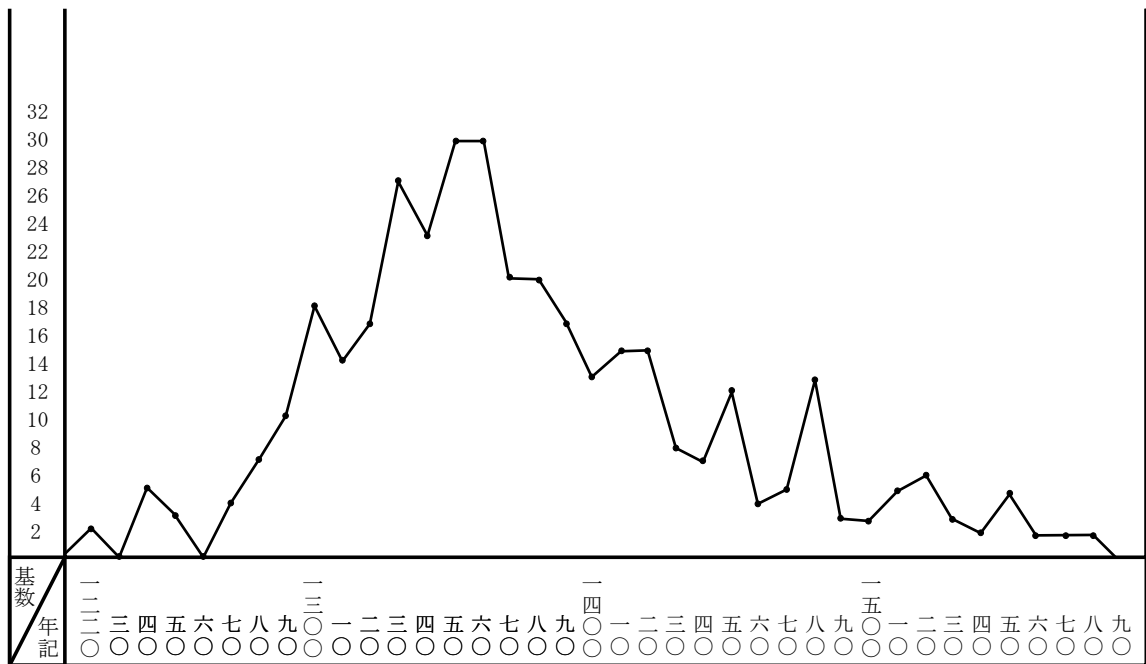
板碑 K1209 (第1図右) 高さ約51.0cm・幅約15.7cm・厚さ約2.3cmの緑泥片岩製武蔵型板碑であり、ほぼ完形である。基部と裏面には、鑿による加工痕がある。頭部に二条線を刻み、やや簡略な蓮台の上部に阿弥陀如来を表すキリークの種子が薬研彫りで彫り込まれている。また、「康安元年 四月」の銘がある。



第1図 岩殿出土板碑 (S=1/5) 左: K1208・右: K1209



第2図 埼玉県における板碑の年代 (埼玉県立歴史資料館編 1981)



第3図 東松山市における板碑の年代 (東松山市教育委員会編 1981)

4 小結

埼玉県東松山市岩殿は、日本有数の青石の産出地に近く、市内の中でも多くの事例が確認されている地域である。今回報告した資料は、形状や規模が概ね同様であり、銘文に元応元(1319)年、康安元(1361)年と、多少の時期差があるものの、いずれも同じ14世紀代の板碑であった。埼玉県内における板碑の造営数は、1300年代から急激に増加し、1360年代に750基を超えた後、徐々に減少していく(第2図)。このような板碑の生産動向は、先に見た東松山市内の状況とも共通している(第3図)。従って、岩殿出土の両板碑は、ともに最盛期の事例ということができる。

ところで、九十九川を隔てた800mほどの空間には、北条時政に謀殺された比企能員〔? - 1203〕が信仰を寄せたと伝わる正法寺や、鎌倉公方の足利基氏〔1340 - 1367〕が正平18(1363)年に敷いたとされる陣跡など、歴史的な史跡が残されている。ここで紹介した資料に関しては、岩殿に残された板碑群との考古学的比較研究はもとより、地域史における位置づけについても検討していく必要がある。

埼玉県内の板碑資料は、膨大な数が存在するため、これまでも多くの検討がなされてきたが、本報告が今後の研究に活かされれば幸いである。これに引き続き、当館が所蔵する未報告資料の整理を進め、活用を広げていきたい。

謝辞

本稿執筆に際しての採拓は、本学文学部教授の佐野光一先生をはじめ、松窗印社の方々に御協力いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

参考文献

- 小松崎百恵 2014 「千葉県市川市 下総国分寺出土板碑」『國學院大學学術資料センター研究報告』第30輯
國學院大學学術資料センター
- 小松崎百恵 2015 「東京都渋谷区 猿楽町出土板碑」『國學院大學学術資料センター研究報告』第31輯 國學院大學学術資料センター
- 埼玉県立歴史資料館 編 1981 『埼玉県板石塔婆調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 東松山市教育委員会事務局市史編さん課 編 1981 『東松山市史 資料編』第2巻 東松山市

(公財) 茨城県教育財団